

資料：秋田大学医学部保健学科紀要14(2)：79 - 86, 2006

作業療法に対する期待とニーズ 公開事業におけるアンケート結果から

高橋 恵一* 児玉 ひとみ** 宮田 信悦***

要 旨

秋田県作業療法士会では、2005年2月に作業療法（以下OT）を県民に広報・啓発する目的で、公開事業「作業療法フェスタ2005」を開催した。この事業において、一般の方々がOTに対してどのようなニーズや期待があるかを把握するため、来場者約250名に対しアンケートを実施し、117名から回答を得た。設問のうち、本事業に対する意見・感想を求める自由記述部分をKJ法によるカテゴリー抽出による分析を行った結果、本事業のようなOTを知る機会をもっと増やしてほしいという要望が強いことが示唆された。今後も本事業を継続し、さらなるOTの広報・啓発活動を行っていきたいと考える。

はじめに

作業療法（以下OT）は、我が国においてその資格制度が制定されてから40年が経過し、有資格者も2万人を越える規模となった。しかし、一般社会においては未だに知名度・認識度の低い職種だと言われており¹⁾、作業療法士自身もその多くがそのことを感じていることと思われる。境ら²⁾は山形県におけるOTの知名度に関する調査を行ったところ、OTは介護福祉士や社会福祉士、救急救命士などの比較的新しい職種よりも知名度が低かったことを報告している。このような現状に対し、日本の作業療法士の組織である（社）日本作業療法士協会や（以下協会）各都道府県作業療法士会は、これまで広報部門等を設置し、様々なOTの広報・啓発活動を行ってきた。秋田県作業療法士会においても、広報部の他、2005年より公益的な事業を展開をしていくために事業部を設置し、同年2月に県内におけるOTの広報・啓発を目的とした初の公開事業「作業療法フェスタ2005」を開催した。

この事業において、我々は来場者に対してアンケート調査を行い、OTの周知度、および本事業に対する

意見・感想、OTに対する要望を伺い知ることができた。本稿では、その結果とともに、そこから読み取れるOTに対する一般市民の期待とニーズについて、今後の展望をふまえて報告する。

秋田県作業療法士会の概要

「理学療法士法・作業療法士法（1965年制定）」により、1967年第2回国家試験において秋田県に初の作業療法士が誕生した。その後1976年に日本作業療法士協会東北地区連絡会秋田県支部発足を経て、1983年に秋田県作業療法士会（以下秋田県士会）が発足した。発足当時の会員数は19名であったが、2005年度の会員数は285名、会員が所属する施設数も103施設となっている³⁾。会の目的は作業療法士の学術技能の研鑽及び人的資源の陶冶に努め、OTの普及発展を図り、もって県民医療の向上に資することとしている。主な活動として、1年に1回の県学会、3つのOT対象領域別（身体障害領域、精神・老年期障害領域、発達障害領域）の研修会、新人教育プログラム研修会の開催などの卒後教育・生涯教育活動の他、年1回の学術誌「秋

* 秋田大学医学部保健学科作業療法学専攻

** 能代山本訪問看護ステーション

*** 手形訪問看護ステーション

Key Words: 作業療法
公開事業
期待とニーズ

「田作業療法学研究」の発刊などによる学術・教育活動や機関紙の発行、パンフレット、インターネット上のホームページなどによるOTの広報・啓発活動等を行っている。

・ 作業療法フェスタ2005の概要

1. 目 的

秋田県士会の公益事業として、秋田県民に対し、作業療法士のもつ知識・技術を県民の医療・保健・福祉の分野で有効活用していただけるようOTの啓発活動を行うことを目的とする。

2. 開催日時・場所

2005年2月26日(日)、秋田市の中心地にある公共施設「秋田拠点センターアルヴェ」にて開催した。開場時間は午前11時から午後3時までの4時間で行われ、終了までに約250名の来場者があった。

3. 企画内容

作業療法作品展

OTの治療手段の一つである作業活動を紹介するために各病院・施設OT室で行われている手工芸等の作品をOT対象者および施設から公募し展示した。当日の出展作品数は14施設から157点の作品の出展があった。刺し子、切り絵、籐細工、木工、エコクラフトなどをはじめ、35種類の作業種目の作品が展示された(図1)。

パネル展示

協会広報部が作成したOTについてわかりやすく解説した広報活動用パネル12枚を展示し紹介した。

自助具展示

作業療法士が対象者の日常生活活動の援助を行う際に紹介・使用している自助具を展示し紹介した。片手用調理道具をはじめ、食事、更衣、入浴、排泄などの日常生活動作に関連した道具・機器を展示のみでなく、実際に使用してもらうことで理解してもらえるよう展示の工夫をした(図2)。

相談コーナー

福祉用具に関する相談をはじめ、作業療法士になるための養成過程に関する進路相談などを受け付けた。終了までに15件の相談があり、最も多かったのが進路・就職に関する相談で12件、他に自助具取扱業者についての相談、デイケア実施事業所の所在に



図1 作業療法作品展



図2 自助具展示

関する相談、生活支援の具体的方法に関する相談がそれぞれ1件ずつあった。進路・就職に関する相談内容は、県内就職の状況に関する相談、養成校入試の難易度に関する相談等があった。

VTR・DVD放映

協会広報部が作成したOT紹介用VTRおよびDVD「私の選択～作業療法士を目指す～」を放映し、主に高校生らが視聴している場面が見られた。

ホームページ紹介

秋田県士会がインターネット上で公開しているホームページをパソコンにて紹介した。

福祉機器展示

福祉機器取扱業者5社よる車イス、座位保持装置をはじめとする最新の福祉機器を展示・紹介した。

． アンケート調査の対象と方法

2005年2月6日「作業療法フェスタ2005」(以下、本事業)に会場した一般の方約250名にアンケート用紙を配布した。アンケート内容は 本事業開催を知った情報源に関する設問、 OTの周知度に関する設問、 今回の企画の中で興味を持ったコーナーに関する設問、 本事業に関する意見・感想、 OTに対する要望の5項目からなる(表1)。

このうち設問4の本事業に対する意見・感想を求める自由記述回答をKJ法によるカテゴリー抽出によって分析を行った。KJ法は文化人類学者の川喜田(1967)が考案したもので、無秩序な情報を統合整理することによって、新たな発想や共通点を発見し、問題解決のヒントや糸口を導き出すの方法として広く様々な分野で用いられている⁴⁾。

今回のアンケートで得られた自由記述回答の具体的

分析手順は次のとおりである。

- 1) まず感想、意見の文章から1カードに一つの意味になるように文章を抽出し、カードを作っていく。
- 2) 得られた多数のカードを意味的内容が似たカード同士にまとめ、それに見出しをつけてカテゴリー化し整理する。
- 3) グループ同士の関係性を図式化して全体の構造を把握し、最後に問題解決の方向性を導き出す。

なお、分析作業には筆頭筆者の他に2名の事業部員が関わり、抽出作業やカテゴリー化に際して妥当性を維持するように努めた。

また、設問2の回答によって、アンケート回答者を(6)その他を除いた5つの群、すなわち(1)OTをはじめて知った群、(2)OTの名前は知っていた群、(3)OTの仕事の内容を知っていた群、(4)実際にOTを見たことがある群、(5)実際にOTを受

表1 アンケート調査票

<p>秋田県作業療法士会 作業療法フェスタ2005</p>	<p>へようこそ!</p>
<p>アンケートにご協力ください。</p>	
<p>回答者 性別：男・女 年齢：()才</p>	
<p>あてはまる数字に をつけて下さい</p>	
<p>Q1. このイベントがあることを何で知りましたか？</p> <p>1. 新聞 2. 秋田市の広報誌 3. ポスター 4. インターネット 5. 人から聞いた 6. 会場に来て知った 7. その他()</p>	
<p>Q2. 「作業療法」という職業をどの程度知っていますか？</p> <p>1. はじめて知った 2. 名前は知っていた 3. 仕事の内容を知っている 4. 実際に見たことがある 5. 実際にうけたことがある 6. その他()</p>	
<p>Q3. 今日会場して興味をもったコーナーはどれでしたか？いくつでも をつけて下さい。</p> <p>1. 作品展 2. 自助具展示 3. VTR放映 4. 相談コーナー 5. 説明パネル 6. ホームページ紹介 7. 福祉機器展示</p>	
<p>Q4. 今回のイベントに対するご意見・ご感想をなんでもかまいませんのでお聞かせ下さい。</p>	
<p>Q5. 作業療法に対する要望などございましたらお聞かせ下さい。</p>	
<p>ご協力ありがとうございました。</p>	

けたことがある群というようにOTの周知度別として分類したとき、周知度群と回答者の年代に関連があるかを Spearman の順位相関係数で、設問1の本事業開催についての情報源の違いと周知度群に関連があるかを Kruskal-Wallis 検定にて、周知度群と設問4における意見・感想の6つの大カテゴリーに関連があるのか Kruskal-Wallis 検定を用い、それぞれ有意水準を5%で検討した。

結果

来場者約250名にアンケートを配布し117名から回答を得た。そのうち年齢、性別の無記入がある回答を除いた有効な回答者数は115名（男性26名、女性89名、平均年齢 40.1 ± 18.5 ）であった。

1. 本事業開催の情報源について

設問1「このイベントがあることを何で知りましたか」に対して、「人から聞いた」という回答が39名(27.7%)、次いで「新聞」26名(18.4%)、「会場に来て知った」27名(19.1%)、「ポスター」15名(10.6%)、「秋田市広報誌」25名(17.7%)、「その他(他市町村広報誌、作品展示者からの連絡、デイケア利用者の家族など)」8名(5.7%)、「インターネット」3名(2.1%)であった(表2)。

2. OTの周知度について

設問2「OTという職業をどの程度知っていますか」に対して「仕事の内容を知っている」が37名(32.2%)、次いで「名前は知っていた」34名(29.6%)、「実際に見たことがある」16名(13.9%)、「初めて知った」13

表2 設問2 OTの周知度に関する回答群と他設問回答との関連

設問2 回答群	人数 (%)					
	回答1 初めて知った	回答2 名前は知っている	回答3 仕事内容を知っている	回答4 実際に見たことがある	回答5 実際に受けたことがある	回答6 その他
	13 (11.3)	34 (29.6)	37 (32.2)	16 (13.9)	5 (4.4)	10 (8.7)
年代 $p=0.18$						
0 ~ 9 代	2 (1.7)					
10 代		5 (4.3)	12 (10.4)	2 (1.7)		1 (0.9)
20 代	1 (0.9)	3 (2.6)	2 (1.7)	2 (1.7)	1 (0.9)	4 (3.5)
30 代		8 (7.0)	4 (3.5)	5 (4.3)	1 (0.9)	0
40 代	2 (1.7)	6 (5.2)	8 (7.0)	5 (4.3)	1 (0.9)	3 (2.6)
50 代	1 (0.9)	5 (4.3)	6 (5.2)	1 (0.9)	1 (0.9)	2 (1.7)
60 代	2 (1.7)	6 (5.2)	4 (3.5)	1 (0.9)		
70 代	3 (2.6)	1 (0.9)	1 (0.9)			
80 代	2 (1.7)				1 (0.9)	
設問1 回答別 $p=0.0008^{**}$						
新聞	1 (0.7)	8 (5.7)	12 (8.5)	2 (1.4)		3 (2.1)
ポスター		5 (3.5)	4 (2.8)	2 (1.4)	1 (0.7)	3 (2.1)
広報誌		4 (2.8)	10 (7.1)	8 (5.7)	2 (1.4)	1 (0.7)
インターネット			1 (0.7)			
人から聞いた	4 (2.8)	10 (7.1)	13 (9.2)	8 (5.7)	1 (0.7)	3 (2.1)
会場で知った	8 (5.7)	11 (7.8)	5 (3.5)	2 (1.4)		1 (0.7)
その他		2 (1.4)	2 (1.4)	2 (1.4)	1 (0.7)	1 (0.7)
設問4 カテゴリー別 $p=0.04^*$						
カテゴリー1	5 (3.2)	7 (4.5)	22 (14.0)	5 (3.2)	2 (1.3)	5 (3.2)
カテゴリー2	1 (0.6)	5 (3.2)	12 (7.6)	6 (3.8)		
カテゴリー3		8 (5.1)	7 (4.5)	4 (2.5)	1 (0.6)	2 (1.3)
カテゴリー4	1 (0.6)	4 (2.5)	3 (1.9)	2 (1.3)		
カテゴリー5	1 (0.6)	3 (1.9)	1 (0.6)	4 (2.5)		4 (2.5)
カテゴリー6			2 (1.3)	2 (1.3)		
無記入者	6 (3.8)	16 (10.2)	10 (6.4)	2 (1.3)	2 (1.3)	2 (1.3)

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

名 (11.3%)、「その他 (自身がOT 3名, 家族がOT 3名, 息子が目指している, 子どもがOTを受けた, 講習会に参加した, 知り合いの作品をみたことがあるが各1名)」10名 (8.7%)、「実際に受けたことがある」5名 (4.4%)であった (表2)。

3. 各企画に対する興味について

設問3「今日来場して興味をもったコーナーはどれでしたか (複数回答可)」に対して「作品展」89名 (39.2%)、次いで「自助具展示」50名 (22%)、「VTR放映」35名 (15.4%)、「福祉機器展示」33名 (14.5%)、「パネル展示」11名 (4.9%)、「相談コーナー」7名 (3.1%)、「ホームページ紹介」2名 (0.9%)であった (表3)。

4. 本事業に関する感想・意見

設問4「このイベントに対するご意見・ご感想をお聞かせ下さい」に対して85名の記入があった。得られた自由記述回答の文章はKJ法のカテゴリー抽出手順に従って1カード1文となるよう抽出作業を行った。その結果、108のカードが抽出され、それらは次の6つの大カテゴリーに分類された (図3)。

1) 大カテゴリー 「このイベントの企画内容が良

表3 各企画に対する興味

企画名	人数 (%)
作品展	89 (39.2)
自助具展示	50 (22.0)
VTR放映	35 (15.4)
相談コーナー	7 (3.1)
説明パネル	11 (4.8)
HP紹介	2 (0.9)
福祉機器展示	33 (14.5)

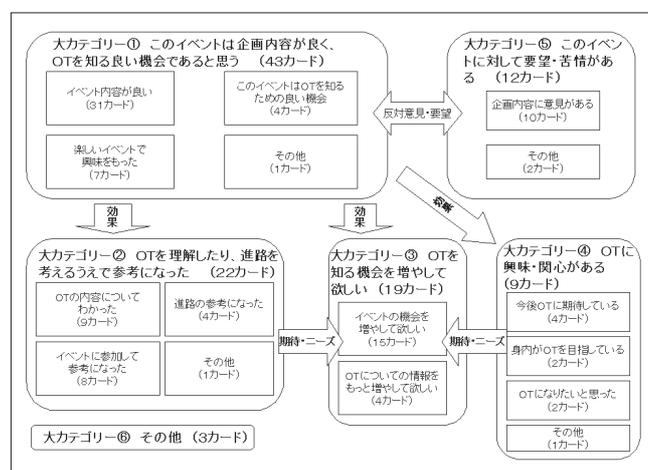


図3 設問4回答のカテゴリー化

く、OTを知る良い機会となった (総カード数43) これを構成する中カテゴリーは「企画内容が良かった (31カード)」,「OTを知るための良い機会 (7カード)」,「楽しいイベントで興味を持った (4カード)」,「スタッフの方が分かりやすく教えてくださったのが良かった (1カード)」の4つであった。

2) 大カテゴリー 「OTを理解したり, 進路を考えるうえで参考になった (総カード数22)」

これを構成する中カテゴリーは「OTの内容についてわかった (9カード)」,「参加して参考になった (8カード)」,「進路の参考になった (4カード)」,「OTは人との触れ合いが大切だと思った (1カード)」の4つであった。

3) 大カテゴリー 「このイベントのようなOTを知る機会をもっと増やして欲しい (総カード数19)」

これを構成する中カテゴリーは「イベントの機会を増やして欲しい (15カード)」,「OTについての情報をもっと広報してほしい (4カード)」の2つであった。

4) 大カテゴリー 「OTに興味・関心がある (総カード数9)」

これを構成する中カテゴリーは「今後OTに期待している (4カード)」,「身内がOTを目指している (2カード)」,「OTになりたいと思った (2カード)」,「人口はどれくらいいるのですか (1カード)」の4つであった。

5) 大カテゴリー 「企画内容に対して要望や苦情がある (総カード数12)」

これを構成する中カテゴリーは「この企画内容に対して意見がある (10カード)」,「机が固定されていない (1カード)」,「趣旨がよくわからない (1カード)」の3つであった。

6) 大カテゴリー 「その他 (総カード数3)」

どのカテゴリーにも当てはまらない内容「はじめて見学した」,「若い人が多い」,「なるべく自宅でも人間らしい生活ができるのが一番だと思います」が各1カードずつ抽出された。

5. OTに対する要望

設問5「作業療法に対する要望などございましたらお聞かせ下さい」に対して22名から自由記述の回答を得た。内容は本事業のようなイベント開催の要望8件, OTの普及・増員の要望5件, OTに対する応援・感謝5件, その他質問等3件であり, 設問4の回答と重複した内容が多かった。

6. OTの周知度と他の設問との関連性

OTの周知度群と回答者の年代との間には有意な差はみられなかった ($p=0.18$).

OTの周知度群と設問1の本事業開催の情報源の違いには有意な差がみられた ($p=0.0008$).

OTの周知度群と設問4における6つの大カテゴリーの間には有意な差が認められた ($p=0.04$) (表2).

考 察

設問5のOTに対する要望に対する回答は少数であったことと設問4の回答内容が重複している傾向があったため、ここでは設問4の意見・感想のカテゴリー化による本事業に対する来場者の評価、およびそこから読み取れるOTに対する期待とニーズを中心に考察し、今後の事業のあり方について展望を述べたい。

1. OTの周知度について

設問2において、OTを初めて知ったという回答は11.3%、それ以外の88.7%は何らかの形でOTを知っているという結果を得た。しかし、設問1の本事業開催の情報源と周知度との間に有意な差があったことから示されるように、来場者の多くは事前に何らかの形で本事業開催の情報を得ており、元々OTに関する何らかの知識や興味があって自ら訪れた方々であった。よって、今回のアンケート調査結果では対象の選定に偏りがあるため、一般市民におけるOTの周知度を示唆することはできない。ただし、設問1の「会場に来て知った」という回答者において、27名中19名(70.3%)は何からの形でOTを知っていたという結果からは、OTは一般市民にある程度周知されていると言えるのではないかと考える。

また、今回のアンケートでは他医療職種との比較した場合の知名度の調査や、周知の内容についてどの程度正しく理解しているのかについては把握できていない。よって、今後は本事業を継続していく中で、より詳細なOTの知名度および職業内容などの理解の質的な側面に関する詳細な調査や、対象者が限定されない方法でのOTの知名度に関する調査等を実施していきたいと考える。

2. 作品展の意義と効果

今回のイベント意見・感想のカテゴリー化において大カテゴリー「このイベントの企画内容が良く、OTを知る良い機会となった」が最もカード数が多かった要因として、それを構成する中カテゴリーをみると、

多くの来場者が作品展において障害をもつ方が制作した作品の出来映えの良さに感銘を受けていることが関連していると考えられる。OTの周知度別にみても、「実際にOTを見た」、「OTを受けた」以外の群において大カテゴリーに属する回答をしている傾向が伺え、作品展によって、OT対象者のリハビリテーションに励む姿を想像することができたこと、さらにはそれを通してOTという職業の内容の理解もしくは興味をもつことへとつなげることができたのではないかと考えられ、本事業がOTの広報・啓発活動として有用であることが示唆された。しかし、ここで考慮すべきことは、作品展は一般市民にOTの特徴を理解してもらうのに容易な手段ではあるが「OT=手工芸」というような誤解を招く危険性も含んでいることである。手工芸などの活動はあくまで治療手段の一つであり、OTは対象者の日常生活、社会生活を作業活動として捉え、それに対してアプローチを行う職業であることを同時に広報・啓発していく必要があると考える。

また、感想の中には、おそらくOT対象者の家族からと思われる「このような機会が本人(OT対象者)の励み・意欲につながるになるので継続してほしい」との声があった。

本事業当日、来場者の中には作品展に出展した対象者の方が家族づれで多数訪れ、自分の作品の前で家族や担当作業療法士と記念撮影するなどの微笑ましい光景をみることができた。また、事業終了後においても地域の新聞に本事業の作品展の様子が掲載され、掲載された写真がある老人保健施設の展覧作品であったことから、その施設の対象者の間でしばらくの間大きな話題を呼んだとの報告があった。一般的に病院・施設のOT室では、個人制作した作品は対象者が持ち帰ることが多いため、作品を展示・発表する機会は少ない。努力して制作した作品を工芸品や芸術作品の展示会のような地域社会に注目される場に出展することは、作業活動に対する動機付けとしての役割を果すのみでなく、障害をもちながらも自己の能力・可能性をアピールする機会と成り得る。よって、本事業の作品展はOTの啓発のみでなく、OT対象者に対しても生活の質を高める役割を果す重要な機会であると考えられる。

3. OTの広報の必要性

大カテゴリー「OTを知る機会をもっと増やしてほしい」は現在のOTの知名度の低さとこれまでの広報・啓発活動の不十分さを反映した結果であると思われる。また、この背景には設問5の回答にあった養成校増設を求める要望、施設における作業療法士の不足に対して人員確保の対策を求める要望、発達領域にお

けるOTの拡大を求める要望にあるように秋田県内における作業療法士の不足と職域や所属施設の少なさなどが関連していると思われる。近年、日本の作業療法士有資格者数は養成校の増加もあって急増しているが、秋田県においては養成校は本学のみであり、加えて近年の本学入学者の県内出身は割合は半数を下回る傾向が続いている。また、県内就職率も年度によって異なるが、全体ではやはり県外就職者よりも若干下回る傾向にある⁵⁾。この要因もあってか、秋田県士会への入会員数は一時期よりもやや伸びなやんでおり、2006年現在で、47都道府県士会の中で秋田県士会の会員数は下位に位置している⁶⁾。これに加え、県内の作業療法士が所属する施設数は103施設、発達領域の専門施設に至ってはわずかに2施設という現状にある。さらに現在、秋田県内にはOTが所属する施設がない市町村が6市町村、1施設のみは7市町村も存在している。このような秋田県の現状において、県内の高校生が進路を選択する段階で、進路情報等からOTという職業の内容はある程度理解していても、それを実際に目にする機会は非常に少ないと思われる。

将来のOTの担い手を発掘、育成するためにも、我々は地域において少しでも多くの方にOTという職業に理解・興味をもってもらうため、本事業をはじめとする「OTを知る機会」を増やしていく必要がある。さらに、実際に事業を計画する際には、できるだけ集客率の多さを見込める地域や開催会場を選択しているが、地域格差を考慮した開催地の配慮や広報の仕方を検討していく必要がある。これに関して秋田県士会では、本事業以外に協会、都道府県士会連絡協議会の要請によって毎年8月に作業療法推進活動月間(OT月間)を設け、県内の作業療法士所属施設における施設見学・一日体験の事業を行っている。これまでこの事業における参加者は高校生が多く、進路選択の参考の機会としているようであり、実際に参加した高校生の中には、数年後には作業療法士となって県内に就職しているケースも少なくない。よって、本事業のような一会場でのイベント形式の事業形態だけではなく、実際に臨床現場でOTに触れる機会を提供し、県内全域をカバーした広報事業も有効であると思われ、継続していきたいと考えている。また、その他に、相談事業や派遣事業のような年間を通じて実施するような事業の実施形態も今後は検討していくべきと考える。

．おわりに

公開事業で得られたアンケート結果から、一般市民の多くがOTについて何らかの知識をもっていること

が分かった。しかしながら、その知識の程度や正確性についてまでは把握することができなかったため、今後の課題としたい。

また、本事業のようなOTを知る機会をもっと増やしてほしいという要望の強さを伺うことができ、今後もOTが地域社会において身近な存在なるよう広報・啓蒙活動を行っていく必要があると考えられた。

また、医療の分野だけでなく、保健・福祉の分野、あるいは特別支援教育などの新しい教育の分野において、多様化するニーズに応えていくために、OTの特性・特徴を活かしつつ、さらに自己の研鑽に努め、対象領域・職域の拡大をしていかななくてはならないと考える。

最後に、本研究のようなOTの知名度・周知度に関する研究はあまり行われていない。しかしながら、自分達の知名度・周知度をあげる努力をするためには、まず自分達がどの程度その地域社会に知られているのかを知ること、そして、自分達が行ってきた広報・啓蒙活動がどの程度の成果をあげているのかを知ることが必要ではないだろうか。その意味で今回の調査研究は我々にとって有意義なものであったと考える。

文 献

- 1) 境 信哉・村井真由美・他：作業療法士の知名度に関する調査～山形県の場合～．山形保健医療研究1：38-44，1998．
- 2) 長谷川元：神奈川県作業療法士会会長あいさつ．神奈川県作業療法士会．(オンライン)，入手先<<http://kana-ot.com/index.html#contents>> (参照2006-10-3)
- 3) 秋田県作業療法士会広報部：秋田県作業療法士会の歴史．秋田県作業療法士会．(オンライン)，入手先<<http://www2.odn.ne.jp/akita-ot/>> (参照2006-10-3)
- 4) All About：All About用語集(KJ法)．(オンライン)，入手先<http://kw.allabout.co.jp/glossary/g_career/w000634.htm> (参照2006-10-3)
- 5) 秋田大学医療技術短期大学部：秋田大学医療技術短期大学部自己点検・評価報告書．2005
- 6) (社)日本作業療法士協会：作業療法白書2005．作業療法25特別号：17-23，2006
- 7) 浅野有子：作業療法の定義を再確認しよう，地域生活支援へ職域を拡げる戦略を練ろう．OTジャーナル37：766-767，2003
- 8) 竹内さをり：地域住民に対する作業療法士の役割．作業療法20：60-65，2001

- 9) 浅野有子・大歳太郎：茨城県作業療法士会地域支援活動とノーマライゼーション．作業療法22特別号：79, 2003
- 10) (社) 日本作業療法士協会福利部：平成14年度求人状況調査報告．作業療法23：287-293, 2004
- 11) 岡村太郎, 坂田祥子・他：病院における地域展開の方法と現状．リハビリテーション研究66：26-30, 1990
- 10) (社) 日本作業療法士協会福利部：平成14年度求人状

Occupational Therapy : Expectations and Needs Results of Occupational Therapy exhibition questionnaire

Keiichi TAKAHASHI* Hitomi KODAMA** Shinetsu MIYATA***

* Course of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Akita University

** Noshiro Yamamoto Visiting Nursing Station

*** Tegata Visiting Nursing Station

The Akita Chapter of the Japanese Occupational Therapy Association convened the exhibition "Occupational Therapy Festa 2005" in February 2005, for the purpose of public information and enlightenment. At the exhibition a survey was carried out via questionnaire into what kinds of expectations and needs exist regarding Occupational Therapy. Out of approximately 250 attendees, 117 surveys were returned. Free text opinions and thoughts regarding the exhibition were analyzed via the KJ method. Results suggest that the public would like such opportunities for understanding Occupational Therapy to be held more frequently. We would like to continue holding such events for the purpose of informing the public about Occupational Therapy.